慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 小島清著 世界経済入門：日本貿易の環境 |
| Sub Title | |
| Author | 深海, 博明 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1967 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.6 (1967. 6) ,p.665(69)- 666(70) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19670601-0070 |
| Abstract | |
| Notes | 新刊紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670601-0070 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 新刊紹介

## 松尾弘著
## 『工業経済の理論と政策』

本書は、碩学松尾博士が多年にわたる成果を、「工業政策論」の講義を借りて展開されたものである。工業経済に関する著書だけでもその数は多大にのぼるが、本書が私にとって最も興味を喚起するのは、「工業政策を経済政策の一部門」としてとらえ、「したがって本書は工業に中心をおいた経済政策論」という点である。「政策は現在の生活に一定の影響を与え、これを一定の方向に導こうとする実践行為であるから、そこではなによりも先に現在の諸事実についての合理的思惟、分析の研究を要求する理論を欠いては政策論の構成は不可能」である。このような本書を一貫するプリンシプルは、経済政策論の当初の伝統であったといっていい。ところが、学問の深化とともに、このプリンシプルが忘れられ、工業経済は自己完結的になり、それだけの政策ができるかのように信じられ、そのことが、現実に整理さるべきある種の中小企業を保護延命させ、日本経済の発展にマイナスになっていることは周知のとおりである。

このことは、工業経済についていま一度政策論の立場から検討が加えられねばならないことを示しているのに反し、このような意図をもった本が少なかったことは残念なことでもあった。その点、本書は、単なる工業経済にとどまらず、経済全体の中から工業を考えるという構成をとっており、工業発展政策の国民経済政策的意義、さらに政策論から、工業化にともなう技術の変化・経済社会の変動から、オートメーションに至るまで、理論と現状分析とを巧みにおりまぜて展開していく。

博士は政策論の科学性を、確率的な科学の予測にもとづくものとして考えておられ、その正しさは試行錯誤によってしかいえないとされるが、その限り私も賛成である。絶対的唯一の政策目的はあり得ない。しかし同時に科学によっても満たされない感情が政策目的を支える要素であり、それが福祉とつながることも忘れてはならないはずである、この点については、いまこの短かい紹介では意をつくせないので、いずれ別稿で論じたいと思うが、いずれにせよ、工業経済という問題をとりあげながら、このように、かくも重要な問題にまでも視角を拡げ、しかも、中堅企業論・コンビナート・有効競争論・オートメーションなどの新しい問題を体系の中に汲みいれられることに成功しているということは、本書の価値をより一そう高めるものである。

（評論社・昭和四二年三月刊・A5・三〇〇頁・九八〇円）　—加藤　寛—

＊　＊　＊

## 一河秀洋著
## 『財政学ノート』

入門書を読むことはやさしいが書くことはむずかしい。財政学の場合、「財政」が多元的はたらきをもっているだけに経済学の応用だけで済むものではない。この本の一番のメリットは著者がこの辺の呼吸をよく心得ていることである。むずかしい財政問題をむりなく読者にのみこませるソフトな講義ムードがこの本には満ち溢れている。

また手っとりばやく現代財政学のアウトラインと日本財政の現状をつかもうという人にもこれは有難い本である。はじめに戦後の日本経済と財政から入り、予算のしくみと作用を財政投融資や国庫収支にいたるまで説きおよぶ。つぎに経費や租税の構造を最近のトピックである公共投資や担税力限界論までふくめ、その上わが国の公債の現状説明まで加えられている。そして最後にフィスカル・ポリシー、つまり有効需要操作としての財政政策の経済的効果にいたるまで懇切かつわかりやすい解説がいっぱいに盛り込んである。

問題群の構成を全体についてみると特に目新しいものはないが、把え方はよくポイントをついている。とりわけ第Ⅳ章・第2節、「租税原則」と第3節、「租税の作用—転嫁」は伝統的原則論や伝統的転嫁論だけにとどまらず、現代的アプローチからの再評価を試みているところは、著者の意欲的な姿勢がよみとれるばかりでなくこの本に新鮮な味わいをただよわせていて気持がよい。

わずか一七五ページのテキストによくこれだけ沢山の内容を盛り込めたものと感嘆させられるが、これも学会第一線で活躍する著者の力量の一端を示すものであろう。それだけに注文もだしたくなる。それは制度的分析と理論的分析の結合度である。建築にたとえると、土台と柱がガッチリしていないと屋根も鴨居もくずれやすいし、うまく結合しないと家そのものが倒れる。理論と制度のバランスはよくとれているが結合は弱いというところも眼につく。たとえば経済成長と財政政策を「予算のしくみと作用」なり経費や租税構造の分析と平行して解明するという方向をとれば、理論と制度の結合度を高めることができたであろう。「はしがき」にある著者の狙いの一端がこの方向で実現できたのではないかと考える。

総括的にみて、大学全学年のみならず財政の知識を身につけたい読者層にすべて推薦できる好著である。（白桃書房・昭和四二年一月刊・A5・一七五頁・六五〇円）　—古田　精司—

＊　＊　＊

## 小島清著
## 『世界経済入門
——日本貿易の環境——』

一九五八年は、第二次大戦後の世界経済の重大な転換期であったといわれている。それ以降、世界経済は基調的に下り坂に入り、新しい浮揚力を注入するのでなければ、繁栄を持続できないと考えられ、数多くの困難・問題が発生している。勿論、今日までのところ世界経済はまがりなりにもこれらに対処し、繁栄をつづけているが、ここでこのような世界経済の基本的潮流・構造・主要問題点はどこにあるかを考究し、それにわが国がどう適応していったらいいかを、もう一度、真剣かつ冷静に考え直してみる必要があるように思われる。

本書は、かかる問題に関して著者が最近数年間にわたって発表されてきた数多くの研究成果を、やさしく一般向けに『日本経済新聞』の「やさしい経済学」の欄に執筆されてきたものを、加筆訂正のうえ問題別に体系づけられたものである。

通読してとくに指摘できる本書の特徴は、次の諸点であろう。

第一に、世界経済の基本的潮流・問題点が明確に把握されており、現代世界経済に関する入門書としての役割を十分に果していること。

第二に、とりあげられている問題は、国際通貨問題、世界貿易の自由化と統合化、南北問題の三つであり、最後に、それらの変貌の根底にあるものとして、国際貿易パターンの

垂直貿易から水平貿易への構造変動、その構造変動の要因が分析されており、単なる歴史的・実証的分析にとどまらず、一つの理論の筋を通しての把握がなされていること。

第三に、これらの考察を通じて、日本の立場、日本貿易の環境・進路といった視点が十分に活かされており、こういった世界経済の動向下にあって、日本は今後どうしていったらいいかが明確化されていること。

第四に、個々の問題において、それぞれユニークかつ有意な数多くの理論・アイディア・実証研究がみられること、例えば、規範的概念によるドル不足の分析、合意的分業原理、中南米経済の「高原経済学」による研究、関税一括引き下げの効果分析、貿易結合度やシェア指数による貿易構造・比較優位の実証分析、交易条件の長期的下降傾向と上方硬直性や輸出前線や輸入依存度の山型変化の法則の指摘・発見等々である。

第五に、かかる理論的・実証的研究のみでなく、日本の立場を十分考慮しつつ、数々の政策提言がなされていること。例えば、レント・カレンシー構想、太平洋自由貿易地域構想、直接的生産目的援助等々である。

これらの諸点からも明らかなように、本書は入門書でありながら、それを越えるすぐれた理論的・実証的研究書であり、さらに読者に対して問題意識なり世界経済への関心をよびおこさずにはおかない魅惑的な啓蒙書でもある。勿論、数多くの内容・理論・アイディアをもり込みすぎているために、本書だけでは十分に理解できない部分もあり、さらにここにもり込まれた理論・実証分析・政策提言に関しては、ユニークかつ大胆であるが故に、あえていえば多くの問題点や疑問も存在する（一層詳細な著者の理論・考え方および問題点・疑問点については、拙稿の『本誌』一九六四年二月号、九月号および一九六五年九月号の研究ノート、新刊紹介、書評等を参照されたい）。しかし本書には、そういった不満や欠陥の指摘をひかえさせる何かがある。それは多分、著者の問題把握の確かさ・ユニークさ、問題意識の強烈さ、現実展開との関連の密接さ等々であろう。

とにかく、こういった問題に関心をもつ初学者のすべてに、本書の一読を推奨したいし、著者にならって多くの人々がこういった問題にとり組み、考え直してみることが是非必要であるように思われてならない。（日本経済新聞社・一九六六年一二月刊・B6・二七七頁・五〇〇円）

—深海　博明—

＊　＊　＊

## 七〇　（六六六）

クリストファ・ターナード
ボリス・プスカレフ　共著
鈴木忠義　訳編

## 『国土と都市の造形』

原著"Man-made America"を読んだのは、たしか一九六三年滞米中であったが、数百頁に及ぶ本文の内容はもちろん、豊富な写真や図版の美しさに圧倒され、アメリカならではの仕事と感嘆した。こうした書物が我国で出版されるのは何時のことかと思ったのであるが、数年を経ずして、その訳書が原著と殆んど変りない体裁であらわれるとは！　何時ものこと乍ら、我国学界の知識欲とそのバイタリティにはおどろかざるを得ない。出版は最近SDを中心として活撥にこの分野の研究紹介に力をそそいでいる鹿島研究所出版会、訳者は工・農学関係の少壮の学徒が六人、東大工学部の鈴木忠義助教授が監訳編集にあたっておられる。

原著者の一人、ターナードは造園学と都市計画論の権威、既に一九三八年特色ある景観論を展開したGardens in Modern Landscapeを発表して以来、都市環境、というよりは生活環境一般について深い造詣をもち、現在、エール大学教授、その関係であろう、原著はエール大学出版から刊行されている。

本書の何よりの特色は、工業化、都市化によって急速に変貌しつつあるアメリカ国土の現状を特に視覚的デザインという側面から把えたことにあり、景観と美という問題が全体をつらぬく一つの糸となっている。全文四四一頁は、序文と結びを除いて、六部にわかたれ、その構成は、

第一部　都市の景観——人工都市の美
第二部　住宅団地——低密度住宅団地の美
第三部　舗装のリボン——高速道路の美学
第四部　技術の記念碑——産業施設、商工業地区の美
第五部　オープン・スペース——レクリエーションの美
第六部　将来への重要課題——史跡の保存

となっている。このうち、第一部は景観一般論ともいうべきもので、現在のアメリカの景観における様々な問題点が人口の定着パターンとの関連において指摘されている。二部以下六部まではサブタイトルであきらかなように、生活環境の主要な側面、住宅、道路、商工業施設、レクリエーション地区そして史跡に関して審美的見地から現状とそのあるべき姿を詳述したものである。豊富な写真と図版が随処にはさまれ、まさに著者の視覚的世界観の表現ともいうべきものであり、この意味で「見る」ことを強調している。とはいいながら、単に「見て楽しむ」という気軽な態度で本書を開いた読者は恐らく後悔するだろう。本書は単に「見る」だけでなく「読む」能力をも要求しているからである。内容はかなり専門的かつ知的なものであり、記述は種々様々な対象について、ある場合には冗長とも思える程詳細に行われているから、本書を読了して、アメリカの景観について、一つのヴィジョンをもつにはかなりの理解力と綜合力とが必要でもある。

主題が視覚的デザインに限定されていることからいって、内容が設計計画、要するに土木工学的になるのはいたしかたない。デザイン上の原理、技術の選択、これらすべてが著しく普遍的・一般的方向において議論されているのが本書の特色でもある。その結果、生活環境について記述しているにも拘らず「土の匂い」「生活の匂い」が消え失せてしまう傾向のあることは否定し得ない。たしかに、社会経済的側面にも周倒に言及されているが、しかしここには景観を考える上で基本的に重要な視角、即ち文化的（カルチュアル）なそれが欠けている。景観を人間がつくりだしてゆくもの、景観の美というものは人間のみに通用するものである以上、われわれ個人々々の行動と物の見方を規制する文化の存在を前提しないでは、これらについて語ることはできない。少くとも極めて重要な部分をミスすることになる。最近の人間工学や行動科学の発達によって、たしかに、われわれは「最適な」生活環境を設計するために有効な多数のインフォメーションをたくわえつつある。しかし、「最適」とは一体何か、又、何故人々は「美しからざる」状態に身を横たえて平気でいるのか、いやむしろそれを安住の地とさえ考えているのか、ハレムの黒人が考える美と、パークアヴェニューの住人のそれとは果して同じものであろうか、又、ニューイングランドの農夫はニュージャージー州の工員と同じ景観への反応を示すであろうか、これらはすべて文化を中心に考えなければ解答し得ない問題であろう。

ともあれ、本書と対比して、man-made